

いま再び トレーサビリティに注目！ (前編)

「トレーサビリティ」という言葉が普段の生活の中でも聞かれるようになってから数年が経ちます。最近ではスーパーの野菜売り場などで生産者の履歴を見ることができるサービスが提供されるようになった一方で、メーカーのずさんな生産管理が問題になる事案もまだ残っています。今回と次の2度にわたり、製品事故の未然防止や経営リスクの最小限化の対策として再び注目が集まっている「トレーサビリティ」について解説します。



ハイコストパフォーマンス
スキャナー体型モバイルハンディ
TBR-6500

製品事故は企業イメージ失墜の危機

産業界に属するあらゆる企業には、安心・安全な製品を安定的に市場に供給するという社会的責務があります。原材料の調達から製造、製品の流通販売に至るまで、その品質管理には万全を期す必要があることは言うまでもありません。

企業は製品事故を未然に防止し、経営リスクを最小限に留める取り組みとして“ISO9000”や“HACCP”の認証を取得して、品質管理に力を注いできていますが、残念ながらこれらのマネジメントシステムを導入しても製品事故に関するニュースは後を絶たしません。このような事態が企業にどんな影響を与えるのでしょうか。

過去の製品事故を振り返ると、興味深い傾向が見えてきます。

万一の製品事故に備えていた企業とそう

でない企業では、製品事故が発生したときに事故による損失とその後のブランドイメージ回復に対して二極化する傾向が伺えるのです。

テレビのニュースで報道されている記者会見の様子を思い出してください。後々の報道で万一の備えがなかったと判明する企業の多くでは、発端の情報提供からいかに手際が悪いという印象を受けます。もちろん記者会見、テレビという大きなメディアに対する不慣れということもありますが、結果としてメディアや市場からの責任追及が長期に渡って取り沙汰されることで、必要以上に悪いブランドイメージを植えつけてしまうことになります。

さらに製造・品質履歴の不備があったときには、本来、管理していれば必要のなかった範囲まで製品回収を広げることを迫られ、回収判断が遅れることで、回避できるはず

■ 主な仕様

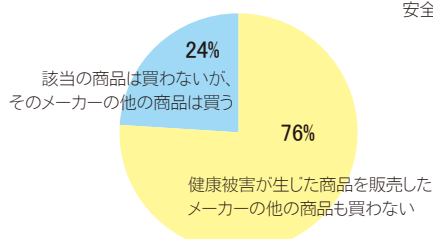
対応コード：JAN/EAN/UPC/ITF, Codebar, Code11, Code32, Code39, Code93, Code128, EAN128, Standard 2 of 5 / O S : Windows CE 5.0 / 通信：U S B ホスト & クライアント、IrDA1.2(SIR)、802.11b/g、Bluetooth V1.2 / 保護等級：IP54 / 外形寸法：85(W) × 149.5(H) × 26.6(D)mm / 重量：300g以下(電池を含む) / 適合規格：CE、FCC、BSMI、VCCI、RoHS指令

の市場への被害がさらに拡大してしまうという最悪のスパイラルに落ちていくというわけですね。

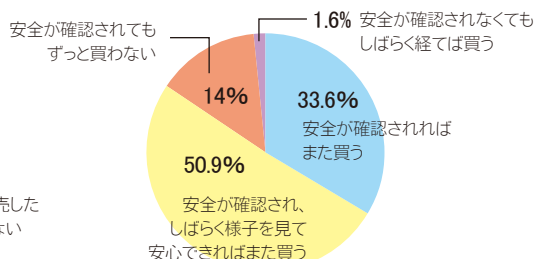
一方、万一に備えている企業では、正確・迅速な情報公開と対策をとることができるため、事故が発生してしまった場合でも自らの責任範囲を素早く知らせることができます。製造履歴や流通経路の特定や回収・撤去といった作業もスムーズに行えるのです。

このような「スピード」が市場に対し被害を最小限に留めるとともに、ブランドイメージを損なうことなく事故を収束させることにつながります。また、このような「スピード」が企業の高度なリスク管理能力をアピールすることにも繋がり、消費者やユーザーに対してブランドイメージの向上をもたらすケースも少なくありません。まさに「災い転じて福となす」ことになるのです。

●製品事故が生じた場合の購買行動



●どの時点で問題のあった商品を買うか



両者の違いはまさしくトレーサビリティシステムの有無の差で、トレーサビリティは企業の存続自体を左右するといっても過言ではないほど重要なリスクマネジメントなのです。

本来、製品事故は起こさないことが大事なのはもちろんですが、人が行っている以上、完全性を求めることも無理があります。「いかなる対策を講じても製品事故は起こりうる」、「リスクをゼロにすることは不可能なのだ」ということを前提に、製品事故の発生防止に努めつつも、万一の際に迅速・適切な対応を取るためのリスク管理——トレーサビリティが重要だといえるでしょう。

普及するトレーサビリティ

いま、さまざまな企業で「ISO9000」やHACCPといった国際品質規格が取得されています。これらの規格の中にはトレーサビリティの確立も定義されているので、これらの認証を受けた企業は何らかの手法でトレーサビリティは実現されている

わけです。

しかし、最近でも先進的だろうと思われていたメーカーが製品事故に見舞われ、大規模な自主回収に乗り出さなければならなくなるなど、国際品質規格を取得しているにもかかわらず製品事故が続いています。このような、ある種の矛盾はどうして起こるのでしょうか。それは認証そのものに「落とし穴」があるからなのです。

さまざまな国際規格では、原材料の使用履歴、製造履歴、品質履歴、流通履歴などを確保するように定義されています。しかし、どのような手法で実現するかまでは決まりがないことがほとんどで、規格に適合するための方法は各企業に任されています。

製品事故が発生したメーカーのトレーサビリティの仕組みに注目すると、「万一のときのために」ひたすら履歴を蓄積する——履歴の蓄積が主目的になってしまっているケースがあります。現場の作業員も履歴の蓄積作業を強いられているだけで、製品事故を減らす仕組みが欠けていては本末

転倒です。

製造業の重要課題の一つは、事故の起きにくい製品作りの仕組みをいかに構築するかです。製品事故が発生しにくいメーカーは、製品作りの仕組みがうまく構築されている上で、その副産物としてリスクマネジメントとなるトレーサビリティが構築されているというわけです。

このような仕組みは実際の生産現場が主体となるので、生産効率や不良率を悪化させるようなことはあってはなりません。また、誰もが確実に作業できなければならないことも言うまでもないことです。このように予防とリスク管理を兼ね備えたトレーサビリティシステムを構築するためには、システムの根底となる情報と物の流れが正確に連動し、かつ生きた情報をいかにリアルタイムで収集するかが鍵となってきます。このような条件にもっとも適しているのがバーコードであり、2次元コードなのです。(次号に続く)

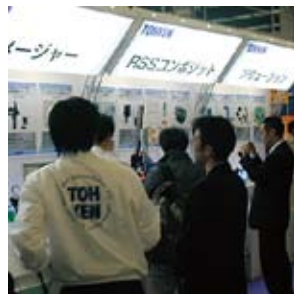
● 展示会情報

第4回 自動認識総合展 大阪 終了

2月15・16日の2日間にわたってマイドームおおさかにて開催された『第4回自動認識展 大阪』に出展、会場には昨年を上回る4千名以上のお客様のご来場を賜り、盛況のうちに終了いたしました。

当社ブースでは新製品各機種とともに、先号の特集でもご紹介したRSS/合成シンボル対応インライン検証機 TVR-3151に注目が集まり、ニーズの高さが感じられました。

資料のご請求、製品のデモなどにつきましては最寄りの営業所、営業部までお問い合わせください。



いろいろQ&A

Q. バーコードの信頼性ってどのくらい???

A. バーコードの信頼性は種類によって変わってきます。
JANの場合の誤読率は15万5千文字に1文字と言われており、Code39の場合はチェックディジットをつけると1億4900万文字に1文字と言われています。
ITFの場合には誤読率が非常に高いので桁数チェックとチェックディジットで読取り確認を行なうのが一般的です。

次号予告

4月号は...
『いま再び“トレーサビリティ”に
注目！(後編)』です。

Flags 4月号は4月5日発行です。

TOHKEN

株式会社 東 研
<http://www.tohken.co.jp>

本社 営業部	東京都新宿区西新宿2-7-1 新宿第一生命ビル
	Tel 03 (5325) 4311~3 Fax 03 (5325) 4318
名古屋営業所	Tel 052 (565) 9091 Fax 052 (565) 9094
大阪営業所	Tel 06 (6353) 5476 Fax 06 (6353) 6125
福岡営業所	Tel 092 (441) 3638 Fax 092 (441) 3639
日立営業所	Tel 029 (276) 9555 Fax 029 (276) 9556

Flags/フラッグス 2007年3月号 Vol.23 2007年3月5日発行

編集・発行 株式会社 東 研 〒163-0710 東京都新宿区西新宿2-7-1 新宿第一生命ビル
Tel 03 (5325) 4322 (編集事務局)

本誌に掲載の記事・写真・図版などは著作権法によって保護されており、無断で転用・転載・複製することはできません。